

## 【研究ノート】

### エストニア歌と踊りの祭典によせて

大中 真

キーワード： 国際関係史、バルト諸国、政治と音楽

#### はじめに

エストニア人は「歌う民族」として知られている。エストニアでは5年に一度、民族を挙げての合唱祭と舞踊祭が開催されるが、これは単なるお祭りではなく、民族としてのアイデンティティを再確認する極めて重要な国家行事である。従って、文化芸術的に貴重だというだけでなく、政治的にも極めて大きな意味を持っている。同じバルト諸国であるラトヴィアとリトアニアも同様な祭典を催しており、三国の行事は2008年にまとめて、ユネスコ（UNESCO, 国際連合教育科学文化機関）の無形文化遺産（Intangible Cultural Heritage）に登録された<sup>1</sup>。参加する合唱団はそれぞれ色鮮やかで美しい各地方ごとの民族衣装に身を包み、舞台に立つ。エストニアの首都タリン郊外にある野外地場には、最大で2万人の歌手を一時に壇上に収容できる巨大な舞台があり、その前で15万人から20万人の観客が演奏を見守る。祭典が終盤に差し掛かり、会場の興奮と感動が高まると、観客も皆起立して数十万人の大合唱となる。この会場の空気は、実際に合唱祭に参加した者でなければ分からない、圧巻である。

三国の中で最初に民族合唱祭が組織され開催されたのは、1869年のエストニアであった。続いて1873年にラトヴィアでも開催され、リトアニアは遅れて独立後の1924年に第1回の祭典が挙行されている。三国がロシアからの分離独立を宣言するのは、第一次世界大戦が終了する1918年である。特にエストニアとラトヴィアで、独立の半世紀近く前から合唱祭が実施されてきた歴史は、両国の民族意識形成と国民国家建設にこの祭典が大きな影響を与えたことを容易に想像させる。現在、ラトヴィアではエストニアと同じく5年ごと、リトアニアでは4年ごとにこの祭典が実施されている。

ユネスコによる無形文化遺産登録後初めてとなる「歌と踊りの祭典（The Song and Dance Celebration, エストニア語ではLaulu-ja Tantsupeo）」が、2009年夏にエストニアで開催された<sup>2</sup>。筆者はこの祭典に、観衆の一人として参加する貴重な機会を得た。そこでこの小論では、第1章から3章までで、祭典の歴史を簡単に振り返ると同時に、エ

エストニア民族にとって合唱とは何なのか、また政治と音楽とがどのように分かち難く結びついているのかについて、考察してみたい<sup>3</sup>。続いて第4章で、多少旅行記のような筆遣いになってしまうが、この合唱祭が実際にどのようなものであったのかを、筆者の言葉で報告したいと考える。

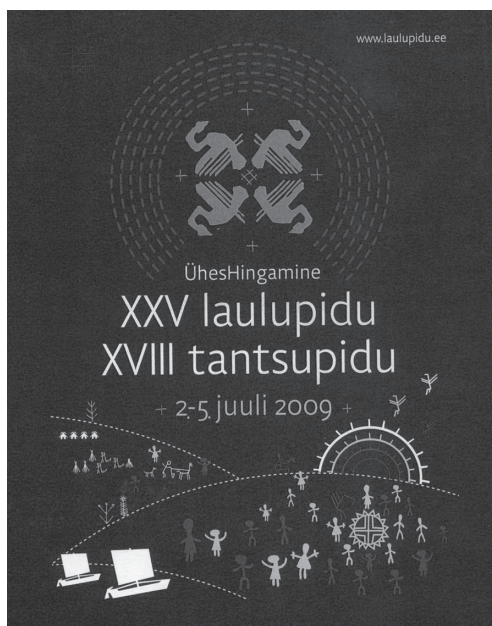


写真 1. エストニア歌と踊りの祭典 2009 年公式ポスター

## 1. 民族合唱祭の誕生

宗教改革以降、エストニアではルター派が広く信仰され、現在でもロシア正教徒およびカトリック教徒を上回る信仰人口を数える。ルター派教会の影響により村の学校で合唱音楽が導入され、17世紀末には少なくとも5冊の合唱曲集が出版されたことが記録されている<sup>4</sup>。ドイツ人貴族により、ドイツ本国のさまざまな音楽習慣が導入され、1830年代始めには、多声合唱がエストニアおよびラトヴィアのほぼ全土に広まった。19世紀には西欧諸国、とりわけドイツにおいて、市民階級の台頭とともに合唱団の結成や歌謡祭の開催が広まったが、こうした「歌う文化」がはるか辺境ヨーロッパの地であるバルト地方にも伝播したと見ることもできよう。当時のエストニアとラトヴィアは、帝政ロシアの統治下に置かれていたものの、実際にはバルト・ドイツ人が支配階級であった。彼らは中世の東方植民以来、この地を地主貴族として支配し、文化面でも指導的立場にあったからである。

こうした各地方や村々での合唱団活動を組織化し、成功させたのは、エストニア民族の父ともいわれるヨハン・ヴォルデマル・ヤンセン (Johann Voldemar Jannsen,

1819-90)である<sup>5</sup>。彼は小学校教師からジャーナリズムの世界に転じ、エストニア語による初めての本格的な週刊新聞を創刊編集し、1857年から1880年まで発行し続けた人物である。ヤンセンの尽力により1869年、エストニア第二の都市であるタルトゥにおいて第1回全エストニア合唱祭が行われた。現在のエストニア共和国の首都はタリンであるが、19世紀にはタルトゥがエストニアの様々な文化活動の中心地となっていた。実際にタルトゥの住人は今でも、19世紀にはこの地が事実上エストニアの首都だったと誇らしげに語るのを、筆者は何度も聞いたことがある。祭典は3日間に亘り、51の合唱団、845名の歌い手、15,000人の聴衆を集めて挙行された。

合唱祭自体は、リフランド（英語名リヴォニア。エストニア南部の地方、帝政ロシアによる行政区画）の農奴解放50周年を記念して開催されたが<sup>6</sup>、ちょうど1860年代はエストニア史におけるいわゆる「民族の覚醒（national awakening）」が急速に広まった時代であり、数世紀もの間抑圧されてきたエストニア人が民族としての意識を自覚するにあたって、この合唱祭は象徴的な出来事となった<sup>7</sup>。折しもロシアでは、近代化を目指して大改革を行った皇帝アレクサンドル2世（Aleksandr II, 位1855-81）の治世でもあり、エストニア知識人階級が登場して文化面での活動が活発化した。例えば第1回合唱祭で愛国的演説を行ったヤコブ・フルト（Jakob Hurt, 1839-1907）は、1870年代以降、詩人としてまた民族活動家として、エストニアの民間伝承を生涯かけて収集し、ヤンセンと並んで民族運動初期の中心的人物となった<sup>8</sup>。

ヤンセンのもう一つの功績は、後のエストニア国歌の作詞と演奏実現である。もともとはドイツ生まれのフィンランド人であるフレデリック・パシウス（Fredrik Pacius, 1809-91）が1843年に作曲した旋律に、ヤンセンが歌詞をつけたものが『我が祖国、我が喜びと幸せ（Mu isamaa, mu õnn ja rõõm）』であり、第1回合唱祭で歌われた。ゆったりした親しみやすい旋律に祖国愛を歌詞として載せた曲は、たちまちエストニア全土に広まり、民族運動を代表する歌となった。やがてエストニア共和国が独立すると、1920年に公式に国歌として採用されることとなる。面白いことに、パシウスのこの曲はフィンランドにおいてもフィン語の歌詞で人気を博し、ロシア革命後にフィンランドが独立すると、同国でも国歌となった。現在でも、両国の国歌は、歌詞こそ違え同じ旋律である。

これに加えて、ヤンセンと第1回合唱祭を語る上で外すことのできないのは、リディア・コイトゥラ（Lydia Koidula, 1843-84）の存在である<sup>9</sup>。今日に至るまで、エストニア史上最大にして最高の女性詩人とされるコイトゥラは、ヤンセンの娘でもあり、父の新聞事業を助け、第1回合唱祭開催にも尽力した。20代にしてすでにエストニア中に才能を知られた彼女は、病気によって早世するまでに300を超える詩を残したが、最も有名な作品は愛国的な詩『我が祖国 我が愛（Mu isamaa on minu arm）』である。アレクサンデル・クニレイト（Aleksander Kunileid, 1845-75）がこの詩に曲をつけ、第1回合唱祭で演奏された。やがてコイトゥラの詩は、エストニア民族の魂を象徴し、また支えるものとなってゆく。現在のエストニア共和国100クローン紙幣は、美しく聡明なコイトゥラの肖像

画が用いられている<sup>10</sup>。

合唱祭はその後、1879、1880、1891、1894、1896、1910年に開催された。ロシアではアレクサンドル2世の暗殺後、バルト地方におけるロシア化が強行され、エストニア文化に対する抑圧が再び強まった。表1を見ると分かるが、祭典の開催にも皇帝の在位や戴冠を祝賀するという大義名分が必要とされた。しかし、そのような中でも、エストニア人は歌うことで民族としての一体感を強く意識するようになり、合唱祭はエストニア民族統合の装置として機能するようになった。第1回合唱祭開催には、支配階級であったドイツ人貴族たちとの妥協や彼らからの介入があり、開催許可が2年間棚上げされ、エストニア人の手による曲はわずか2曲しか許されなかった。しかし、回を重ねるごとに、祭典そのものの主導権をエストニア人が握るようになる。1896年の祭典では410の合唱団と5,681名の歌手が参加、1910年には527の合唱団と10,100名もの歌手が参加するまでに成長していった。

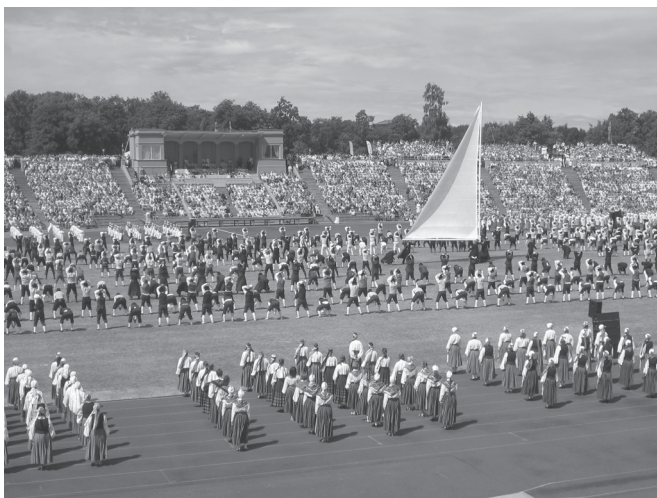


写真2. 舞踊祭の様子（2009年7月、撮影筆者）

## 2. 独立国家の祭典から「占領下」の祭典へ

エストニアが国家として独立を果たすと、合唱祭は重要な国家行事となった。首都タリンには1919年に音楽学校（コンセルヴァトワール）が設立され、また1921年にはエストニア声楽家連盟も結成された。こうした準備を経た独立後初の第8回合唱祭は1923年に、国家元老ユハン・クック（Juhan Kukk, 任1922-23）の宣言によって開催され<sup>11</sup>、これ以降、5年ごとに祭典を行う慣行が定まった。会場も現在と同じ、タリン郊外のカドリオルク公園の芝生地が当てられた。来賓の中にはハンガリー王国摂政のホルティ・ミクローシュの名が見え、またヨーロッパ各国から多数の報道陣が訪れるなど、独立国家の

行事に相応しいものとなった。これ以後、1928、1933、1938年の合計4回の合唱祭が実施されたが、合唱祭は回を追うごとに準備段階から組織化され、また規模も大きくなった。戦間期独立時代最後の祭典は、共和国独立20周年に捧げられ、大統領コンスタンティン・パッツ（Konstantin Päts, 任1938-40）の後援によりかつてないほど盛大に開催された<sup>12</sup>。参加団体数は569、演奏者は17,501名を記録し、観衆は10万人近くに達したといわれている。しかし、翌1939年9月にヨーロッパで大戦が勃発すると、エストニアをはじめとするバルト諸国は、ナチス＝ドイツとソ連邦とによる権力政治の只中に巻き込まれる。大戦勃発直前に結ばれた独ソ不可侵条約秘密議定書により、1940年6月から8月にかけてエストニアはソ連軍によって占領され、以後半世紀に亘って独立と主権を奪われることとなった。

現在は合唱祭と同時に行われる舞踊祭の前身は、1926年にエストニア青少年協会が開いた第1回エストニア文化の夕べだとされるが、公式には1934年の第1回エストニア競技会が最初とされている<sup>13</sup>。つまり、戦間期には合唱祭と舞踊祭はそれぞれ独立して開催されていたことになる。その後1939年には第2回競技会が行われたが、やはり合唱祭同様、大戦により中断を余儀なくされた。

第二次世界大戦において、エストニア人は艱難の歴史を歩み、その人的物的損失は膨大なものとなった。戦争と占領により、全エストニア人口の3分の1とも、4分の1ともいわれる人命が失われたといわれている。大戦初期にはソ連邦の占領下におかれ、ソヴィエト化の強制と大規模な粛正や虐殺、シベリヤへの追放が実行された（1940-41年）。やがて独ソ戦が始まると、ナチス＝ドイツによる軍事占領と支配が続いた（1941-44年）。そして大戦末期、ドイツ軍が敗走すると再びソ連軍が現れ、1944年から45年にかけて、エストニア全土はソヴィエト再占領下に置かれた。その支配は、以前にも増して過酷かつ徹底的なものとなった<sup>14</sup>。

今や「エストニア・ソヴィエト社会主義共和国（ESSR）」と名乗る政府と機構が設立され、ソヴィエト連邦を構成する15の共和国の一つにエストニアは位置づけられた。ソヴィエト政府は、戦間期のエストニア共和国を「ブルジョワ独裁」であったと位置づけ、その存在を全否定し、独立時代を偲ばせるような記憶そのものを抹殺しようとした。独立共和国時代の国旗、青／黒／白の三色旗は掲揚も所持も厳しく禁止され、ヤンセンが作詞した国歌は、口ずさんただけでシベリヤに強制連行されたと伝えられている<sup>15</sup>。社会の隅々に至るまで、あらゆるエストニア的なものは消し去られ、代わってプロレタリア的、ロシア的、共産主義的なものに置き換えられた。

それでは、民族合唱祭はどうなったのであろうか。興味深いのは、ソ連邦は多民族国家を標榜し、また「公式に」はロシア民族以外の各民族文化の保護と尊重を喧伝していたことである。加えて、ソヴィエト当局が民族合唱祭を成功させれば、それは共産主義のプロパガンダの下で大衆動員に成功したことを意味する。第二次大戦後、スターリン主義の高まりの中で、芸術政策に対してよく言われた「形式において民族的、内容において社会主

義的」という原則は、まさにエストニアの民族合唱祭に当てはまったのである<sup>16</sup>。このため、1945年に大戦が終わると直ちにエストニア・ソヴィエト政府は、ロシア革命30周年に当たる2年後の1947年に、合唱祭を開催することを決定して準備に入った。

こうして開催された1947年の合唱祭は、戦前のものとはかなり趣を異にするものとなった。戦前の独立時代からの伝統と連続性を断ち切るため、実質的には第12回大会ではあるが、番号はつけられないこととされた。野外会場の大きな屋根には、巨大なスターリンの肖像画と赤旗が掛けられた。また、かつての「ブルジョワ」合唱祭より参加人数を縮小してはならないと要求された結果、6,000名以上の女性歌手や子どもたちまでもが動員された。祭典の開始にあたってはエストニア・ソヴィエト共和国の国歌とソ連邦国歌が合唱され、閉幕に際してはモスクワのスターリンへ感謝の手紙が送られ、その末尾には当時の常套句「我々の賢明なる指導者、教師にして偉大なる友である同志スターリンよ永遠なれ！」で締めくくられる、といった具合であった。またこの合唱祭からは、原則として舞踊祭も同時に行われるようになった。

ソヴィエト当局によるプロパガンダに覆い尽くされた感のある1947年の祭典ではあるが、触れておくべきことが一つある。それは、エストニア人指揮者であり作曲家であるグスタフ・エルネサクス (Gustav Ernesaks, 1908-1993) がコイトゥラの歌詞に曲をつけた、いわばエルネサクス版『我が祖国 我が愛』が祭典の壇上で歌われたことである。4分の3拍子で始まる曲は、主旋律の高音と低音の差が最大2オクターヴ近くもあり、合唱形式を取ることで美しい旋律が効果的に浮かび上がる構造になっている。この曲は演奏後たちまちにエストニア中に広まり、最も愛され、最も歌われる合唱曲となった。やがて、コイトゥラの父ヤンセンが作詞した、今は歌うことを固く禁じられた独立時代の国家に代わって、誰言うともなく「非公式な国歌」と呼ばれるようになる。



写真3. タリン市内から歌の原まで行進する合唱団 (2009年7月、撮影筆者)

### 3. 歌う自由の復活へ

ソヴィエト体制になって2度目の合唱祭はわずか3年後に計画されたが、それはエストニア・ソヴィエト共和国の成立10周年を祝うという政治的目的のためであった。また1950年は、スターリンに対する個人崇拜が頂点に達した時期であり、非常な政治的緊張の中で準備が進んだ。エストニア共産党内でも肅正が大規模に実施され、祭典の組織委員会の中からも逮捕者が続出し、計画は直前まで何度も変更された。選曲はスターリン主義路線により近いものに入れ替えられ、ロシア語の曲が追加された。折しもソ連邦では、社会主義リアリズムのもと、いわゆる「ジダーノフ批判」が吹き荒れ、ドミトリー・ショスタコーヴィッチをはじめとする多くの音楽家、作家、詩人が「反ソヴィエト的」だとして激しい攻撃を受けていた。エストニア民族合唱祭も、まともにその影響を受けた形となったのである。今回も会場には巨大なスターリンの肖像画が掲げられ、公式ポスターの中心にもスターリンが描かれた。祭典はアレクサンドロフ作曲による、独裁者賛美の『スターリン・カンカータ』で開始され、スターリンを称える合唱曲が何曲も演奏された。共産党による大衆動員の結果、参加団体数は1,106、演奏者は31,907名にもものぼり、史上最大規模の祭典となった。

これほどまでに猛威を振るったスターリン主義も、1953年に彼が死ぬと徐々に収まり、1955年の合唱祭では前回のような政治的緊張状態も緩和された。会場正面に掲げられる肖像画が、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの4人の平等な横顔のレリーフになったことは、それを象徴していた。観衆にはソ連邦を代表する著名なヴァイオリニスト、ダヴィッド・オイストラフもおり、合唱の素晴らしさを賞賛したと伝えられている。さらにフルシチョフが最高権力者となると、緩やかな統制の下で1960年の合唱祭が行われた。この大会では、それまでの古典ギリシア建築のような野外会場の建物から、半円形のドームを被せたような、前衛的で斬新なデザインの建築物が新たに使用されることとなった。現在でも合唱祭は同じ建物を使っているが、古さを感じさせない独特な景観を保っている。最終日の合唱祭終了後、会場の興奮と熱気から、自然発生的に会場でエルネサクス版『我が祖国 我が愛』の合唱が起こり、その場にいたエルネサクス自身の指揮によって最後まで歌いきった。この曲は1947年に歌われた後は、愛国的すぎるために祭典のプログラムからは外されていたが、これ以降、全ての合唱祭において、祭典終了後に『我が祖国 我が愛』が暗黙裏に唱和されるようになった。もちろん、ソヴィエト当局にとっては苦々しい「ハプニング」だったに違いないが、数十万人いる会場で演奏を止めることも弾圧することもできず、この「伝統」は共産主義体制末期まで続いた。こうして『我が祖国 我が愛』は、エストニア民族にとって特別な曲となったのである。

ここでエルネサクスについても多少解説が必要であろう<sup>17</sup>。彼は戦前の独立期にタリンのコンセルヴァトワールを卒業し、1944-72年までの約30年間近くも同校で合唱指揮法を教えた。ソ連邦による占領と併合時に国外に脱出した芸術家も多かったが、彼は国内に

留まる道を選んだのである。エルネサクスは1944年に国立男声合唱団を設立し、以後実に50年近くに亘って同団の指揮と監督を務めた。毎回の合唱祭においても、彼は中心的な役割を担った。彼はソヴィエト時代、複数のレーニン勲章を受賞、また桂冠指揮者の称号を得るなど、数々の名誉に輝いた。こうした経歴にも拘わらず、彼は生涯を通じて民族的な合唱曲を300も作曲したのを始め、20の単声曲、5つのオペラを残したことに表れるように、常にエストニア人からは愛国者であると見なされていた。エストニア人の国民性には、ソヴィエト時代に体制にすり寄った人物を嫌悪する傾向があることを思えば、彼は希有な存在であるといえよう。実はエルネサクスは、エストニア・ソヴィエト社会主義共和国国歌も作曲している。しかし、その曲想は、これが『我が祖国 我が愛』を作曲した人物と同じ作品かと思わせるほど、全く凡庸かつ平凡であり、彼の心がどこにあったのかを知る格好の比較対称物である。

その後も合唱祭は、1965、1969、1975、1980、1985年と、原則として5年おきに着実に開催された。そしてソ連邦の最高指導者にゴルバチョフが就任、ペレストロイカが開始されると、時代は大きく動き始めた。連邦を構成する15共和国の中で、最も早くから民族の自立を求める運動を始めたのはエストニアであった。こうして1988年夏の「歌いながらの革命(The Singing Revolution)」を迎えることとなる<sup>18</sup>。これは音楽祭あるいは合唱祭を発火点として集まった民衆が、当時のエストニア共産党指導部への抗議を意思表示し、結果として保守派の第一書記が6月に解任に追い込まれた事件を指している。第一書記解任の翌日、合唱祭の会場には15万人にのぼる民衆が詰めかけ、それまで厳禁されていた独立時代の三色旗を打ち振る光景が繰り広げられた。そして9月には、本来の民族合唱祭とは別に、共産党に対抗して結成されたエストニア人民戦線が主催するエストニア歌謡祭(エストニア語で“Eestimaa Laul”)が開かれ、実に30万人以上が集まり、合唱によって民族の団結とソヴィエト支配への抗議を表現した<sup>19</sup>。この数字は、エストニア共和国全人口の4人に1人、ロシア人等を除いたエストニア人に限れば実に3人に1人が、一つの会場に集まったことを意味している。これ以後、エストニアは主権宣言、そして独立回復宣言を発表し、モスクワとの対決姿勢を強めてゆく。エストニアの体制移行と独立回復については、既に多くの論考が発表されており、また筆者も最近拙稿を出したのでそちらに譲りたい<sup>20</sup>。

1990年に開催された第21回合唱祭は、従って、名称こそエストニア・ソヴィエト共和国の名の下に実施されたが、モスクワからの検閲や圧力がかかることもなく、選曲も自由に行われた。愛国的な歌や教会音楽も演奏が可能となり、エストニア人の作品がプログラムの中心に置かれることとなった。また、海外に亡命・移住したエストニア人の合唱団や舞踊団が、アメリカ、スウェーデン、ドイツ、オーストラリアから参加した。82歳になっていたエルネサクスの壇上に上がり、自らの指揮で『我が祖国 我が愛』を演奏した<sup>21</sup>。観衆の数は、過去最高の30万人以上だったともいわれている。自由に歌うことのできる民族合唱祭が、こうして復活したのである。



法的に独立回復（1991年9月）した後の最初の合唱祭は、1年前倒しされて、1994年に開催された。これはタルトゥでの合唱祭誕生125周年を記念しての変更であったが、ソヴィエト時代の開催周期は政治的な計算に基づくものであったので（常にエストニア・ソヴィエト共和国成立からの記念を意識させる効果を持っていた）、本来の姿に戻ったともいえよう。そしてこれ以降は5年周期を守り、現在に至っている。



写真4. 誰もいない歌の原の合唱祭会場。右の塔は聖火台。（2008年8月、撮影筆者）



写真5. 合唱祭最終日のフィナーレを迎えた同じ会場。壇上には2万人以上の合唱団員、人々はエストニア国旗を振り唱和する。（2009年7月、撮影筆者）

#### 4. 2009 年歌と踊りの祭典

筆者が参加した 2009 年夏の祭典、正式には第 25 回合唱祭と第 18 回舞踊祭は、7 月 2 日から 5 日にかけて行われた。今回の標語は「息を合わせて “To Breathe as One”」とでも訳せるであろうか。2 日は午後からタリン旧市街の市庁舎広場で楽器演奏があり、祭典の幕が開いた。すでに市内のあちこちはお祭りの雰囲気満ちていて、活況を呈していた。舞踊祭は 3 日午後 7 時、4 日午前 11 時、5 日午前 11 時にそれぞれタリン市内のカレフ・スタジアムで行われたが、筆者はこのうち 4 日の祭典を見学した。今回のテーマは「海」であり、巨大なトラックの中で、マスゲームのように男性、女性、学生、子どもたちがそれぞれ民族衣装を着けて踊り、演技をするのである。まず「海とエストニアの誕生」と題して 7,460 名の踊り手全員が登場し、音楽に合わせて身体で海の誕生を表現する。その後、物語風の展開に合わせて、様々なダンスが披露され、2 時間以上に及ぶ。最後に「全ての船は母港に辿り着く」という設定で再び 7,000 名以上の踊り手が全員再登場して、大団円を迎えた。会場は完全な屋外であるが、当日は天候も良く、鑑賞には最適であった。

合唱祭は、1 日目が 4 日午後 7 時から、タリン郊外にある、まさに文字通り「歌の原 (Lauluväljak)」で始まった。タリン中心部から歌の原までは約 6km ほど離れているが、その街道沿いを各合唱団やブラスバンドがプラカードを持ち、その日の日中から延々と行進して雰囲気を盛り上げる。こうして演奏者も観客も、三々五々歩きながら会場へと向かうのである。のんびりしているのがエストニアの気風なのか、祭典の開始時間になっても合唱団が会場に到着し終わっておらず、かなり遅れて開会した。まず、聖火台に点灯式が行われた後、合唱祭の開会は、舞踊祭と同様、エストニア共和国大統領トーマス・ヘンドリック・イルヴェス (Toomas Hendrik Ilves, 任 2006 -) によってなされた。彼は若者層を含めて国民の人気の高いらしく、とりわけ大きな声援と拍手が沸いた。今回の合唱祭には、24,705 名の演奏者が登録されていたそうである。演奏は伝統に基づき、まず混声合唱曲『夜明け (Koit)』で幕を開けた。次いで全員が起立して国歌『我が祖国、我が喜びと幸せ』が演奏され、続いてクニレイト版『我が祖国 我が愛』をはじめとする、エストニア民謡が歌われた。一曲ごとに指揮者は交替し、また数曲ごとに混声、男声、女性、管弦楽団などと、歌い手や演奏者も壇上に出たり下がったりしつつ、ゆっくりと進行した。意外に感じたのは、ブルックナーの『アヴェ・マリア』、ワーグナーの『タンホイザー』、オルフの『カルミナ・ブラーナ』など、多くのいわゆるクラシカル音楽が、プログラムに載っていたことである。タリンは緯度が高いため、この季節は夜 10 時近くまで太陽が水平線にあるはずだが、合唱祭の開演後しばらくして気温が急激に低下し、やがて激しい雨と突風が吹き始め、筆者を始め観客のほとんどは途中で席を立たざるを得なかった。残念なことであった<sup>22</sup>。

翌 5 日午後 2 時開始の合唱祭 2 日目は、素晴らしい天気恵まれた。1 日目もそうであったが、会場周辺には数多くの出店がでて、食べ物や飲み物、お土産物売っており、少し席を立って移動するだけで大混乱の状態であった。この日は管楽器楽団による、比較的軽

い音楽演奏で始まった。やがて、少しずつ合唱団が壇上に加わって数を増し、エストニア人には馴染み深い愛唱歌が続ぎ、会場の熱気は高まっていった。舞踊祭でも披露された、エストニア人に最も愛されている結婚式の歌『トゥリャック (Tuljak)』が始まると、壇上では24,000名以上の歌い手が皆肩を組み、身体を大きく揺らしながら大合唱となった。そして終盤にエルネサクス版『我が祖国 我が愛』が演奏されると、熱気は最高潮に達した。皆がエストニア国旗を手に打ち振り、演奏が終わっても、何度も会場ではウェーブが繰り返された。この曲を合唱祭で歌う時には、感極まって泣くエストニア人が多いとも聞く。2日目の終盤ともなると、ほぼ全ての曲が、合唱団と観客の双方からの要請でアンコールされ、プログラム通りになかなか進まなくなる。公式に合唱祭が終わっても、野外で開放的な雰囲気のある会場では、所属合唱団ごとに、そこそこで自然発生的に合唱が始まり、それに観客や他の合唱団が合流してたちまち大きな歌声となって響き、これが延々と続くようである。筆者を始め観客が徒歩で会場を後にしても、歌声は遠くまで風に乗って流れてきた。

## おわりに

筆者が本論でエストニア合唱祭を取り上げたのは、冒頭でも触れたように、政治と音楽の接点を感じるからである。例えば政治と絵画との接点では、フランス七月革命とウジェーヌ・ドラクロワの『民衆を導く自由の女神』が、あるいはゲルニカ爆撃とパブロ・ピカソの絵が、一種の表象としてよく用いられる。エマニュエル・ロイツェの『デラウェア川を渡るワシントン』が、後になってからアメリカ独立戦争のアイコンとなったことも、知られている。それに対して、これまで国際関係論や国際関係史では、あまり音楽の要素を重視してこなかったように筆者には思われる。

ナショナリズムの古典であるコーンの著作によれば、東欧ではブルジョワジーなど中産階級の発達が遅れた結果、知識人階級がナショナリズムの担い手になったという<sup>23</sup>。確かに、第一次世界大戦後に独立ポーランド国家が復活した際、当時すでに世界的に著名なピアニストとして名声を確立していたイグナツィ・パデレフスキが共和国首相となり、活躍した例は有名である。1919年のパリ講和会議において、ポーランド政府代表として出席していたパデレフスキの知名度が、祖国の独立確定に際して大いに役立ったことは間違いない。焦点を合唱と政治にまで絞り込むと、日本の多くの男声合唱団の愛唱歌にもなっている『ウ・ボーイ!』が、その作曲者イバン・ザイツと彼の祖国クロアチアの民族独立運動と密接に結びついている事例を挙げることができる<sup>24</sup>。

本論で見てきたように、音楽の要素を抜きにしてエストニア現代史は語れないし、また政治と音楽をめぐる問題意識はバルト諸国だけに特定されるものでもないだろう。最近、両者の接点に注目する研究も現れており<sup>25</sup>、学問的境界線を越えた研究が今後さらに広がることを期待している。

エストニアはラトヴィア、リトアニアと共に、2004年にはEU（ヨーロッパ連合）に正式加盟し、旧ソ連邦の共和国だったというより、ヨーロッパの一小国であると説明されることが多くなった。すでに冷戦終結から20年が経ち、現在の大学生が生まれた時にはソ連邦が消滅していたことを考えると、日本人のみならず若い世代のバルト諸国に対する心象は、大きく変わっていくことが予想される。独立回復後のエストニア合唱祭も、回を重ねるごとに華やかになり、外国から多くの参加者や観光客が訪れる、国際的な祭典となりつつある。これまでの民族的伝統を、今後エストニア人はどのように守り、また発展させてゆくのであろうか<sup>26</sup>。

表1. エストニア合唱祭の歴史

回数	開催年月日	場所	特記
第1回	1869年6月18-20日	タルトゥ	リフラント農奴解放令50周年記念
第2回	1879年6月20-22日	タルトゥ	露土戦争等により開催が大幅に遅延
第3回	1880年6月11-13日	タリン	皇帝アレクサンドル2世在位25周年記念
第4回	1891年6月15-17日	タルトゥ	皇帝アレクサンドル3世在位10周年記念
第5回	1894年6月18-20日	タルトゥ	農奴解放75周年記念
第6回	1896年6月8-10日	タリン	皇帝ニコライ2世戴冠記念
第7回	1910年6月12-14日	タリン	帝政の記念行事とは無関係に開催された初の合唱祭
第8回	1923年6月30日-7月2日	タリン	独立共和国として初の開催
第9回	1928年6月30日-7月2日	タリン	
第10回	1933年6月23-25日	タリン	
第11回	1938年6月23-25日	タリン	戦間期独立国家として最後の開催
第12回	1947年6月28-29日	タリン	ソヴィエト共和国として最初の開催
第13回	1950年7月21-23日	タリン	エストニア・ソヴィエト共和国10周年記念
第14回	1955年7月20-22日	タリン	
第15回	1960年7月20-21日	タリン	
第16回	1965年7月17-18日	タリン	
第17回	1969年6月28-29日	タリン	合唱祭誕生100周年記念のため変則開催
第18回	1975年7月19-20日	タリン	
第19回	1980年7月5-6日	タリン	
第20回	1985年7月20-21日	タリン	
第21回	1990年6月30日-7月1日	タリン	モスクワからの干渉や統制がなく自由に開催
第22回	1994年7月2-3日	タリン	独立回復後初の開催。合唱祭誕生125周年記念
第23回	1999年7月3-4日	タリン	
第24回	2004年7月1-4日	タリン	
第25回	2009年7月2-5日	タリン	

※ *130 aastat eesti laulupidusid* ([Tallinn?]: Talmar & Põhi, 2002)をもとに筆者作成

## 注

- 1 UNESCO, The Baltic Song and Dance Celebrations <<http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?pg=00011&RL=00087>> (accessed 22<sup>nd</sup> September 2010)
- 2 表題につけたように、「歌と踊りの祭典」と訳すのが一般に日本でも用いられているようである。美しい民族衣装で華麗なステップを踏む舞踊（フォークダンス）祭は、間違いなく素晴らしいものであるが、本論ではより歴史が深い合唱祭に焦点を当てて論ずる。従って以後も、原則として合唱祭と表記することを断っておく。
- 3 本論執筆に当たっては、特にいちいち註のない限り、*130 aastat eesti laulupidusid* ([Tallinn?]: Talmar & Põhi, 2002) に多くを負っている。130年に亘るエストニア民族合唱祭の歴史を扱ったこの本は、豊富な写真、図版、図表などの資料を含んでおり、エストニア語のみならず英、独、仏、露、芬の各国語による詳細な解説文を含んでいる。
- 4 “Song Festivals”, in Miljan, Toivo, *Historical Dictionary of Estonia* (Lanham, Maryland: Scarecrow Press, 2004), pp. 441-443. なお *Historical Dictionary of Estonia* は以下、*HDE* と略。
- 5 “Jannsen, Johann Voldemar”, n *HDE*, pp. 272-273.
- 6 エストニアにおける農奴解放は、1816-1819年にかけて実行された。これは、帝政ロシア全土における有名な1861年の農奴解放の40年以上前のことであり、帝政にとっても実験的な改革であった。
- 7 Raun, Toivo U., *Estonia and the Estonians*, updated 2<sup>nd</sup> ed. (Stanford, California: Hoover Institution Press, 2001), pp. 74-76.
- 8 “Hurt, Jakob”, in *HDE*, pp. 254-255.
- 9 “Koidula, Lydia”, in *HDE*, pp. 285-286.
- 10 ただし、エストニアでは2011年1月1日からユーロ通貨の導入が計画されており、もし予定通り順調に進めば、本論刊行時には紙幣は変更されているであろう。
- 11 「国家元老」とは聞きなれない日本語であるが、エストニア語で Riigivanem、英語で Elder of State と直訳される、独立したエストニア共和国の国家元首を指す言葉である。1921-34年にかけてこの称号が用いられた。実質的権限は弱く、儀礼的存在であった。
- 12 パッツはエストニア独立指導者の中心人物であるが、1934年にクーデタをおこして全権を掌握、以後権威主義体制を確立した。その結果、1938年に新たに導入された大統領に就任した。
- 13 “The History of the Dance Celebrations”, in *Song and Dance Celebration Booklet* (Estonian Song and Dance Celebration Foundation, July 2009), pp. 56-61.
- 14 この時期のエストニアにおける歴史認識については、前号に執筆した拙稿を参照。大中真「歴史をどう伝えるか——ラトヴィアとエストニアの占領博物館を例に」桜美林大学桜美林論考『人文研究』創刊号（2010年）105-116頁。
- 15 “National Symbols”, in *HDE*, pp. 341-342. ところがこの話には、後日談がある。バルト海を挟んでタリンの対岸にはフィンランドの首都ヘルシンキがあり、タリン住民を含めエストニア北部の人々は、冷戦中でもフィンランドのテレビ放送を容易に視聴できたという。ソ連邦は、西側からの情報侵入を阻止するために電波妨害を行っていたが、フィンランドは「友好国」であったことも理由であろう、エストニア北部には妨害を徹底できなかつたようである。従ってフィンランド放送を視聴できた人々は、毎朝毎晩、放送開始時と終了時に流れるフィンランド国歌を、すなわち独立時代のエストニア国歌を聴くことができ、その旋律を忘れることはなかつた。*HDE*にも書かれているが、筆者はこの象徴的なエピソードを、1990年代に、タリン在住のあるエストニア人から直接聞いている。
- 16 Raun, *op. cit.*, pp. 187-188.
- 17 “Ernesaks, Gustav”, in *HDE*, p. 198.
- 18 “Singing Revokution”, in *HDE*, p. 439: “Second National Awakening”, in *HDE*, pp. 433-436.
- 19 Laur, Mati, et. al., *History of Estonia*, 2<sup>nd</sup> ed. (Tallinn: Avita, 2002), pp. 309-310.
- 20 大中真「冷戦終結後のバルト諸国一民主義体制への『復帰』」永松雄彦、萬田悦生編『変容す

- る冷戦後の世界—ヨーロッパのリベラル・デモクラシー』（春風社、2010年）所収。
- 21 実は1980年の合唱祭で、エルネサクスの『我が祖国 我が愛』は、公式にプログラムのフィナーレを飾る曲として認められた。ペレストロイカの始まる前に、すでにこの曲は「非公式」から「事実上の」エストニア国歌になっていた、といえよう。Raun, *op. cit.*, p. 218.
  - 22 筆者が宿泊ホテルに戻っても、テレビでは合唱祭の特別中継は続いていた。暴風雨で何度も中断と再開を繰り返しながら、ほとんど観客のいない舞台の上で深夜まで、全てのプログラムを終えたようである。
  - 23 Kohn, H., *Nationalism: Its Meaning and History* (Princeton, N. J.: D Van Nostrand, 1955).
  - 24 『朝日新聞』2010年9月4日朝刊。
  - 25 例えば、日本を事例として、グローバルゼーションと西洋音楽の連関について論考したものとして、次がある。半澤朝彦「帝国主義、グローバル化と音楽—日本における西洋音楽の演奏」明治学院大学国際学部『国際学研究』第36号（2009年）43-52頁。
  - 26 本論の執筆中、日本エストニア友好協会東京支部監事である山本英二氏（1929-2010）が亡くなられた。山本氏は定年退職後、独立回復後のエストニアに1996年に渡り、タリンで日本語教師としてご夫婦で2年半活躍され、帰国後も文字通り私財を投げ打ち、エストニアから日本への留学生の「親役」となった人物である。筆者が2009年夏に歌と踊りの祭典に参加した際も、現地で大変にお世話になった。草の根国際交流を体現した山本氏の貴重な経験は、自費出版された書、山本英二『エストニアで日本語を教える』（朝日カルチャーセンター「耀」同人会、2009年）に詳しく収められている。山本氏のご冥福を心からお祈りしたい。

## 【参考文献】

### (研究書)

- Laur, Mati, Tõnis Lukas, Ain Mäesalu, Ago Pajur, and Tõnu Tannberg, *History of Estonia*, 2<sup>nd</sup> ed. (Tallinn: Avita, 2002).
- Miljan, Toivo, *Historical Dictionary of Estonia* (Lanham, Maryland: Scarecrow Press, 2004).
- Raun, Toivo U., *Estonia and the Estonians*, updated 2<sup>nd</sup> ed. (Stanford, California: Hoover Institution Press, 2001).
- 130 aastat eesti laulupidusid* ([Tallinn?]: Talmar & Põhi, 2002)
- 小森宏美、橋本伸也『バルト諸国の歴史と現在』（東洋書店、2002年）
- 鈴木 徹『バルト三国史』（東海大学出版会、2000年）

### (公式小冊子)

- Song and Dance Celebration Booklet* (Estonian Song and Dance Celebration Foundation, July 2009).
- Laulu-ja tantsupeo teataja* (Eesti laulu-ja tantsupeo SA, Juuli 2009)

### (楽譜)

- Eestlase lauluvara* (Tallinn: Warner/Chappell Music Finland Oy, 2001)

### (CD)

- 125 Years of Estonian Song Festivals (FORTE: FD 0009/2)
- ESTO-96 (FORTE: FD 0043/2)

### (映像)

- NHK テレビ『地球に乾杯 2万3000人の大合唱 エストニア』（1999年8月26日放映）